C—70 十八世紀フランスにおける異国趣味

学習院女子短大　菅原珠子

目的　近世以降のヨーロッパでは、異国的なもの、殊に東洋的なものへの好みが強く、服飾の分野においてもそれが顕著にみられることは屢々論じられているが、本研究では、具体的な服飾造形の上にどのような形で表わされているか、ということを少しでも明らかにしたいと思う。

方法　時代のモードの傾向がより顕著に表現されているものの一つとして、舞台衣裳をとりあげ、この問題について考えることとした。十八世紀は「劇の内容に忠実な衣裳を」という考え方が次第に拡がって来た時代でもあり、従って特に東洋や西洋古代を舞台とした劇、例えば「シナの孤児」とか「アタリー」等々にみられる当時の衣裳を資料として検討した。

結果　若干の具体例によると、東洋の物語を扱った劇においても、またギリシヤ神話を題材とした劇においても当時の西洋の服飾とは異った雰囲気の服飾の様相がみられる。細かい点についてみれば、例えば、カフタン風の衣服や、ターバンや、房飾り、その他に十八世紀の西欧人は「異国」や「東洋」を感じていたと想像できる。このような未知の世界、現実と離れた世界への憧憬は、実はどの時代にもみられる傾向ではあるが、この時代ではそれが特に「東洋」へ向けられていたともいえよう。